

## 新しい時代における国際文化教育の研究

Studies of Pedagogy of International Cultures and Societies in the New Era

総括研究員：東 好男

分担研究員：時岡ゆかり 七尾 誠 福田美智代 宮田 実

「新しい時代の国際文化教育」についての共同研究プロジェクトが発足して、今年でちょうど3年目となる。新カリキュラム発足時にこれまでの外国語科目は「言語文化科目」と改名し、また、新たにスタートさせた「欧州・米国の社会と文化科目」の教育現場においても、現在「国際文化教育」の具体的実践とその手法の模索の研究を継続している。

「言語文化科目」はもちろん、欧州と米国という分野に限定した「国際文化教育」の可能性を開拓する出発点として、当初は主として他大学の状況把握、その分野における科目の関連教材、テキスト等の資料の収集を中心に、各研究員の基礎資料収集作業を続けてきた。3年目を迎えたこの研究プロジェクトについて、平成10年度の各分担研究員の研究作業状況の現状を以下のように報告しレジュメと致します。

東 好男：

本研究員は初年度において、本学の新カリキュラムで導入となった「国際社会・文化科目」に関連する他大学での直接、間接の事例、教材及びテキスト等の具体的な状況把握に努めた。またこの科目を受講する学生を対象として、これらの科目についての率直な印象、要望、批判、等をできるだけ吸い上げることに努めた。2年度以降は、上記の2種類の調査を継続すると共に、ヨーロッパ、特にイギリスに焦点を当て、この科目の教育内容と対応又は関連する外国の大学での教育事例、手法についての資料の収集に努めた。今年度はこれまでの研究資料の収集を継続すると同時に、本学における「国際文化教育」の実践的、具体的教育内容と方法についての考察を求めることに専念したいと考えている。情報教育の中で培われる、インターネットによる情報収集の効率性は、英語という言語手段を基礎力として初めて効果を持つのは今や常識である。また一方「国際文化教育」において、ツールとしての英語力養成に加えて、絶対必要条件としての国際社会の文化の常識を養成することも今や常識なのである。

時岡ゆかり

インターネットの発達した現代においては、海外の情報を容易に受信することが出来ると同時に、こちらから情報を海外に向けて発信することも可能になった。その手段として、英語表現能力が必要になる。「国際文化教育」を考える上で、これまでは主として積極的コミュニケーションを図るための英語表現能力の向上について、C-Testで測る英語能力と他の英語能力との相関等々を通して、実践を積み上げていく中で模索してきた。今後は

英語教育だけでなく、他の国々におけるそれぞれの文化教育の実態を調査、考察し、これからの日本における総合的な「国際文化教育」のあり方を探る。

### 七尾 誠

新しいカリキュラムがスタートして4年になる。旧「一般教育」にかわる「総合教育科目」の中の「国際社会・文化科目」は、この新カリキュラムになってから初めて開講されたまったく新しい科目の一つである。具体的な講義内容としては「19世紀のフランスにおける民衆の生活」を素材としている。現在、当時流行した「生理学」ものの一つである「学生の生理学」の翻訳に着手しているが、同じ年頃の学生たちの生活を克明に描いており、資料として有用であると思われる。また、昨今の学生たちにとっては画像資料の提示は不可欠のように思えるので、19世紀のイラストを中心に収集につとめている。

### 福田美智代

英語教育とは教育の一部門である外国語教育の一つであり、外国語として英語を教授し学習させることを言う。英語教育の目的は、一般的に外国語を学ぶ目的と重なるところが多い。外国語を学ぶ目的には少なくとも(1)外国語を聞く、話す、読む、書くという技能面、(2)外国語で表されたものを聞いたり読んだりしてその外国の風物や文化を知るという教養面の二つの側面がある。教養に関わりを持たない言語技能は薄っぺらなものであり、外国語技能に支えられない異文化教養も底の浅いものであるがゆえに、この両面が必要なのである。英語に限れば、帰国子女の日本の学校における英語の成績は社会科の成績と強い相関関係を持っているという興味深い報告がある。いわゆる社会科は、社会事象を言語で説明している教科の最たるものである。言語にまつわる文化の面、特に異なる価値観・異なる行動様式もあわせて学習しなければ、真の意味での異文化間コミュニケーション能力の習得は困難なものになるであろう。

### 宮田 実

1998年度も前年度に引き続き「アメリカの社会と文化」を担当した。そして、全研究員が定期的に集まり、各研究員の実践報告を聞き、意見交換をした。今後の言語文化科目、国際文化科目を進めていく上で多いに参考になった。また、「アメリカの社会と文化」の講義ノートやハンドアウト作成のための資料収集を継続的に行った。特に、教育（アメリカにおける第二言語としての英語教育及び高等教育の日米比較）に関する資料収集に力点を置いた。

1999年度は海外留学のため研究員でなくなるが、現地アメリカにおいて更なる調査・研究を進めたい。